

ことばの発達にかかわる指導のありかた

～「暮らし」と「コミュニケーション」を視点に～

出雲市立中央幼稚園
石飛 博至

はじめに

・自己紹介

・忘れられないことば

はじめて構音指導を担当した子の終了時にお母さんから

「私のせいで・・・」

だんだんおしゃべりが楽しくなってきた時におばあちゃんから

「先生に話す勇気をもらった」

本講義の流れ

1. はじめに（言語発達とは？）
2. ことばの理論（様々な言語発達論と、一次のことば二次のことば）
3. ことばの発達をどうとらえるか
（「暮らし」「コミュニケーション（三項関係）」を通して考える）
4. 通級でことばの発達にかかわるとは
5. おわりに

1

はじめに

・言語発達とは？

言語が発達していく・・・どういうことか？

- ・話せる（使える）ことばや理解できることばが増える
- ・自分の気持ちが話せるようになる
- ・コミュニケーションがより活発に取れるようになる 等

→ことばの能力が伸びていく、こう考えてよいのか？

ことばの遅れ（言語発達）が主訴で 通級する子ども

- ・ことばでのやりとりの応答が単発で深まらない
- ・ことばの数が少なく、友達とトラブルになることが多い
- ・相手の意図を理解することが難しく、会話が続かない
- ・理解するのに時間がかかり、覚えたことを忘れやすい
- ・文章を読み取ることが難しく、感想などを話せない 等

→ことばの能力面だけを育てれば、うまくいかなさは解決する？

はじめに（言語発達とは？）

4

「発達の中のことば」という考え方

ことばは他者とのかかわりあいを通して、子どもの全体的な発達（様々な領域や機能など）の中から生み出される。ことばの使用以前に人と豊かに交わり、感情を交わし合い、互いに経験をわかり合うことができることが重要である。

岡本夏木（1982）

→ことばはことばだけで独立したものとして育っていくわけではない（子どもは人とかかわることで「モノ」「コト」「ヒト」を認知し発達していく）

はじめに（言語発達とは？）

5

幼稚園教育では・・・

・言葉は、身近な人との関わりを通して次第に獲得されるものである。人との関わりでは、見つめあったり、うなずいたり、微笑んだりなど、言葉以外のものも大切である。

・幼児は気持ちを自分なりの言葉で表現したとき、それに相手がうなずいたり、言葉で応答してもらうと楽しくなり、もっと話そうとする。教師は、幼児が言葉で伝えたいような経験を重ね、その経験したことや考えたことを自分なりに話すこと、また友達や教師の話聞くことを通じ、言葉を使って表現する意欲や、相手の言葉を聞こうとする態度を育てることが大切である。

引用：幼稚園教育要領解説

はじめに（言語発達とは？）

6

ことばの育ちを考えたときに大切にしたいこと

→「子どもが（私たちが）話せるようになるのはなぜ」という成り立ちの過程（どういう経緯で今に至るのか）をみていくと、心地よく反応を返してくれる相手の存在とかかわりがあるはず
→その子のことば（≡障碍）は、周囲の環境によって変化しうるものと捉える

- ・子どもにとって安心できる、信頼できる存在か
- ・受容的で応答的なかわり
- ・子どもが主体的であること

はじめに（言語発達とは？）

7

「言語発達」(成り立ちの過程)

- ・音韻論
構音、アクセント、イントネーションなど
- ・語彙論
音と音の組み合わせが意味を持つ語になる
- ・統語論
いわゆる文法的事項、分の構造
- ・意味論
語の成分、文中での共起制限など
- ・語用論
文とそれを取り巻く環境との関係 一文では捉えられない問題を扱う
(※きこえとことば研修テキスト P140)

ことばの理論

8

語彙論からみた言語発達

- ・意味を持たない音を組み合わせ、意味を持つ語にする
- ・語と語が組み合わされて、新しい語が生み出される

(例)

「あ」 + 「め」 = 「雨」

「雨」 + 「音」 = 「雨音」

「白い(しろ)」 + 「車(ブーブー)」 = 「しろブーブー」

ことばの理論

10

音韻論からみた言語発達

- ・構音(母音と子音等)、アクセント(話し方の調子や強調される音等)、韻律(イントネーション、長短、高低、リズム等)
- ・「喃語」から意味のある音へと発達(分化)する
- ・構音操作が容易な子音から難しい子音へ
- ・日本語の構音はおよそ100音ある

ことばの理論

9

統語論からみた言語発達

- 語を組み合わせると文になり、規則に従った語順や正しい助詞の使用によって正しい文ができる。文の内部構造、語の順序等、いわゆる文法的事項。
- ・構文理解の発達は、語順から助詞へ発達

(例)「行きました 学校と 私の」という文は統語論からみると誤り

- ・文法は会話、文の違和感を解消するための方策として体系化されたもの
→はじめに文法ありきではないことには注意

ことばの理論

11

意味論からみた言語発達

・適当な語が正しい規則によって並ぶと、意味を表すことができる文になる。語の成分、文中での共起制限等。

(例)「家で 理由を 飲みます」は文法的に正しいが意味をなさない
「12時になったら 食事を食べます」
○ごはんを食べる △食事を食べる

・意味の発達は身近な意味の成分から発達していく

例:「わんわん」は4本足の動物全体の意味で使い始め、「いぬ」という意味に絞られる。その後、他の同義の意味(「ねこ」「たぬき」...)を覚えてから「ほ乳類」という意味にたどり着く

語用論からみた言語発達

文とそれを取り巻く環境との関係、文脈、場面、話者-聴者の立場、会話を成立させる規則など

・統語論、意味論が一文の中の問題を扱うのに対し、語用論では一文の中だけでは捉えられない問題を扱う。

・「パパ、テレビが見えないよ」前後の文脈によって意味が変化
→ パパが邪魔でテレビが見えない、テレビが映らない、テレビがなくなっている 等

・使われる状況によって、文が意味するものだけでなく別の意味を含む → 前提、含意、話者の視点、状況、場面、心情等
対話(会話)の成立には欠かせない

一次的ことばと二次的ことば

・一次的ことば・・・「言語の生活化」

生活のなかで現実経験と寄り添いながら生活の手段として使われることば 状況的文脈(具体的な事物や表情など)による支えがある親しい特定の人とのことば(「あれとってきて」でわかる、対話を通して成り立つ)

・二次的ことば・・・「言語の言語化」(一次的ことばの経験値が大切)

学校教育、標準語の使用を中心とした、話しことば書きことば
状況文脈の助けができないことば、抽象的、言語の文脈が頼り
一方向的、不特定多数を相手にする
セルフモニタリング(自分で自分の話を聞くことで内容調整する)
(※きこえとことば研修テキスト P86)

暮らしについて考える

・学校における姿だけでなく、子どもの主体的な生活全体を考えること、子どもを幅広く見つめること

・検査の数値上、年齢的に求められることと比べてどうか、学校生活を送るうえでの力はどうかという視点だけではなく、その子どもらしい姿をそのまま捉えようとする

・能力の獲得はその子の暮らしの充実につながっているのかふりかえり、多少苦手なままでも今ある力で豊かに暮らすためにはどうあるべきかという視点をもつこと(今必要な能力か、もっと後で必要なのかどうかを見極める)

暮らしとことばについて考える

暮らしを充実させることがことばにつながる

- ・ことばは、生活の場で活用しながら獲得されるもの（一次的ことば）が圧倒的に多い（一次的ことばを十分に育て、二次的ことばにつなぎ、ともに育てていくことがことばの発達において重要）
- ・日々の暮らしの中で伝えたいことが生まれ、それを伝えようとする気持ちが高まり、伝えたい相手の存在があることでコミュニケーションは充実する（通級をそんな子どもの暮らしの一部にできないか）

発達をどうとらえるか？

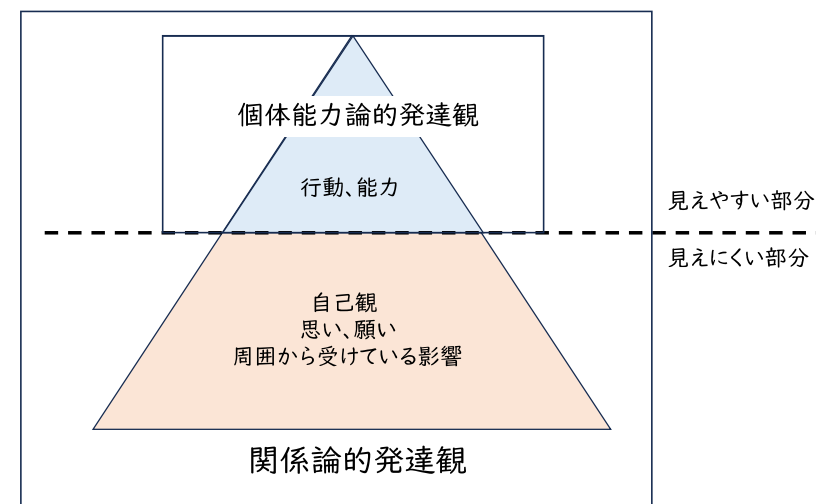
個体能力論的発達観 原 広治（2023）

- ・どのようにして完成された大人に至るのかという視点
子どもの足りないところを補う（取り戻す）
- ・平均で作成した「発達の目安」が「発達の目標」になりがち
到達することが目的化（右肩上がり）、させて力をつける教育
- ・行動や能力など見えやすい部分を取り出してかかわる（問題は子どもの側で起きているので、標準と比較して解決を図ろうとする）

発達をどうとらえるか？

関係論的発達観 原 広治（2023）

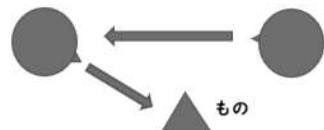
- ・個人の能力にのみ注目しても個々の「暮らし」に即した支援にならない（力をつける、遅れを取り戻すといった学校教育の中だけではない）
- ・子どもの行動の背景にある思い、願いに応えていこうとするかわり（個体能力を包括する）
- ・子どもの発達は「育てる-育てられる」という関係の中で成立する＝「関係の中の個」という視点（問題はかかわり手と子どもの関わり合いの中にあり、かかわり手の見方から解決しようとする）



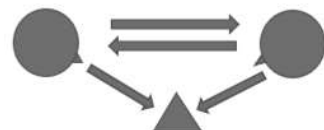
三項関係



A: 親子が目を合わせている状態
見る-見られる関係の成立 (二項関係)



B: 目が合う=相手のまなざしがわかる
→目をそらしたことがわかる
→どちらに目をそらしたかがわかる

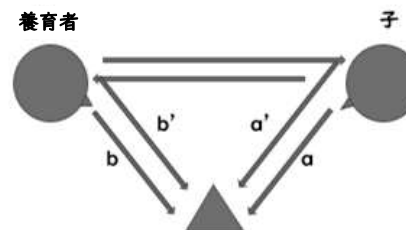


C: 親子が一つのことを一緒に見ている
(三項関係) → 子どもの育ちにおいて重要

ことばの発達をどうとらえるか

20

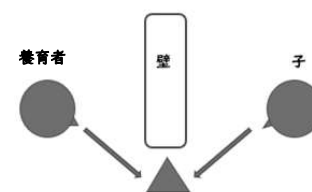
三項関係 (一緒に見る)



A: 自分が見ると同時に相手が見ていることも見ている (感じ合い)

見方、感じ方、かかわり方など、相手の体に表現されたことを同時に見ている

相手に主体性を感じる (相互主体性)
能動-受動のやりとりを同時にする

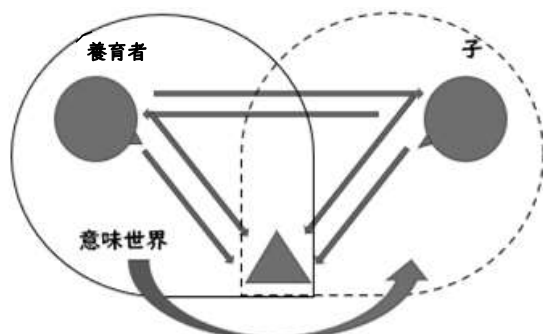


B: 間に壁があると、わからない (相手がどう見ているのかを感じられない)

ことばの発達をどうとらえるか

21

三項関係 (意味のある世界へ)

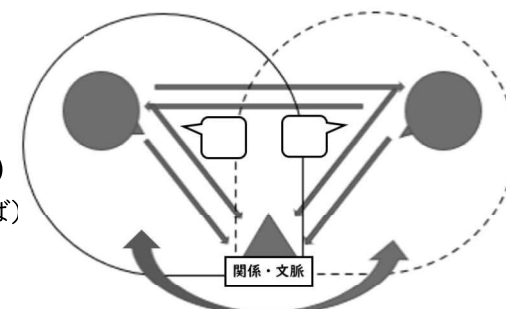


- ・意味するものを知らない世界から、関わり手の意味世界が写し返されて重なることで、子どもは意味のある世界へとつながっていく
- 意味世界の広がりや深まりとともに、意味するものを含めたことばを獲得していく

ことばの発達をどうとらえるか 22

コミュニケーション

- ・子どもと関係・文脈 (共有・共感) をつくってかかると、(一次のことば) コミュニケーションが行き交う



- ・「関係・文脈」がコミュニケーションを「能力」では説明できないものになっている=個体能力だけで語ることができない

- ・一個の主体として子どもの前に立ち、子どもを受け止めてかかわる → 子どもを尊重し、自分の思いを出すことで対話が成立する

ことばの発達をどうとらえるか

23

通級で言語の発達にかかわる

- ・発達の成り立ちの過程にかかわる
→過去の成り立ちはわかるがこれからの発達は未知。安心できる関係性のなかで、肯定的な自己観（自己意識）を感じられるようにする
- ・今、伸びていく力（伸びたい力）を見つける専門性
→子どもの内面理解（行動の背景にある「思い」や「願い」、「周囲から受けている影響」などを丁寧に感じとり、担当者の思いと重ねてみる）
- ・今の「力」でよりよく「暮らす」ために
→「また来たい」と思える通級に、通級の時間も暮らしの一部

通級でことばの発達にかかわるとは

24

コミュニケーション意欲の向上

- ・子どもの得意なこと（好きなこと）から派生した活動は、主体的になり自信をもちやすい
- ・自信があることは良質なコミュニケーションの基盤となりそれがコミュニケーション意欲の向上に寄与する
- ・かわり手もその活動を好意的に捉えられる（一緒に楽しめる）とさらに向上する

通級でことばの発達にかかわるとは

26

言語機能の遅れや偏りに応じた指導

- ①コミュニケーション態度の育成やコミュニケーション意欲の向上（他者と一緒にいることややりとりを喜ぶ態度）
- ②言語活動の楽しさを学ぶ（文字や言葉を使う楽しさ）
- ③実際の生活場面につなげる（日常生活から題材を得て、認知力の向上を図る）
- ④話す、聞く、読む、書くなどの言語スキルの向上（実際の体験とつなげながら）

引用：「教育支援資料」文科省初等中等教育局特別支援教育課H25

通級でことばの発達にかかわるとは

25

言語活動を楽しむ（三項関係）

- ・電車が好きな子どもと絵本を見ながら交わされる会話、知っている電車の話、乗ったことのある電車の話、休日のことなど話題が発展する
- ・子どもが好きな「モノ」「コト」に、担当者が共感し興味をもつ「モノ」「コト」の共有が言語活動を活発にする
- ・担当者が好きな「モノ」「コト」も同様（子どもとの共有事項）

通級でことばの発達にかかわるとは

27

言語活動を楽しむ（三項関係）

三項関係の充実がもたらすもの

- ・子どもと担当者、保護者等、そこにいる人の居心地が良質化
- ・良質化すると、子どもとの間にある「モノ」「コト」の質によらず、言語活動が楽しめるようになる
- ・周囲との関係をいかに心地よい（ことばを使って関わりたい）ものにしていくのか

「能力（学力）」にかかわる

- ・「今、ここ」の力を見極めてかかわる
- ・発達の指標ではなく「その子」がどう変容していったか（能力との向き合い方の変化）を見守る
- ・「子どもである」（≠大人になる）という認識でかかわると、できないことを否定しない見方ができる
- ・良質な関係の中で生じる心地よい時間で、能力にかかわる事柄に取り組む

「育てる」にかかわる

- ・大人の願いではなく、その子の「個」「教育的ニーズ」に応ずる
→「子どもの思い、願い」からかかわりを始める
→今、どのようなかかわりが心地よいのか、求めているのか
→「受け止める」ことが大事になる（言動の背景の思いに心を寄せる）
- ・「関係論的発達観」をもとに「三項関係」を通してかかわる
（お互いに相手の思いや願いを自らの思いに映し、重ねながら かかわり合う関係の中で育て合う）
→暮らしにくさへの支援

まとめ（ことばの発達にかかわる）

◎子どもの好きな「モノ」「コト」を一緒に楽しむ

- ・三項関係の充実（相手をわかろうとしていることは相手に伝わる）
- ・お互いの気持ちを共有しあえる関係
- ・担当者のかかわりから自己を肯定的に感じる
- ・コミュニケーション意欲の向上 ・好きな「モノ」「コト」の広がりから育つことばの広がり
- ・言語活動を楽しむ先に育つことば（一次的ことば→二次的ことばへ）

まとめ（ことばの発達にかかわる）

◎子どもとのかかわりで大切にしたいこと

・目の前の子どもの何にかかわるのかを考える

〇〇のできにくさ、周囲に良さとしてみられにくい行動面だけでなく、それも含めたその子ども全体を捉えたかかわり

・「子どもの思い、願い」からのかかわりを考える

大人の思いや願いから生まれた「ニーズ」ではなく、子どもをまるごと受け止めることで見えてくる子どもの本当の思いや願いを大事にしたかかわり

・子どもが「今」ある力（ことば）でできることを考える

できるようになることを急ぐのではなく、子どもが今ある力を十分に発揮した先に身につく力を信じ、子ども自身が自ら「できるようになりたい」という願いや思いをもつことができるかかわり

おわりに

32

おわりに（好きなことばたちから）

・子どもを信じられるか。保護者を信じられるか。それが教師にとって最も重要なことだ。こちらが信じていないのに、相手に（こちらを）信じてくれと言っても伝わらない（大石益男）

・「ことば」は「こころ」を超えない（牧野泰美）

・生きて機能する「ことば」を育てんとな（大石益男）

おわりに

33

文献

・「子どもとことば」 岡本夏木 1982 岩波新書

・「子どもの心の育ちをエピソードで描く」 鯨岡峻 2013 ミネルヴァ書房

・「言語発達Ⅱ」 安部満明 全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会はじめのいっば2023

・「言語発達と子どもの見方、とらえ方」 原広治 令和5年度島根県聴覚言語障害教育研究会春季研修会

・「ことばの発達を支援するとは」 谷戸諒太 令和4年度島根県聴覚言語障害教育研究会春季研修会

・「H28全国公立学校難聴・言語障害教育研究協議会全国大会島根大会記録集」

34